中央アジア現地事情

ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所の現在

木　村　　暁

筆者は2004年12月から平和中島財団の奨学生として、ウズベキスタン共和国の首都タシュケントに留学する機会を得た。以来2007年3月頃までをめどとして、同国科学アカデミー東洋学研究所 ЎзР Фанлар академияси Абу Райҳон Беруний номидаги Шарқшунослик институтиに研究生стажёр-тадқиқотчиとして在籍し、ここを拠点に史料調査に取り組んでいる。小文では、この間の経験をもとに、東洋学研究所の最近の活動状況と利用方法について簡単に紹介することにしたい。なお、同研究所の概要については、[久保一之「ウズベキスタンにおける中央アジア史研究の現状」『西南アジア研究』39，1993年，50-61頁] をあわせて参照されたい。

研究所の所長はB. A. アブドゥハリモフ博士（1959年生）で、2004年1月から現職にある。現在、研究所では本年（2006年）開催予定の二つの大きな学会に向けて準備が本格的に進められつつある。一つは、4月に研究所で開催されるカルシ2700周年とアミール・ティムール生誕670周年とを同時に祝う合同記念学会、もう一つは、秋にウルゲンチ市で開催されるホラズム・マアムーン・アカデミー1000周年記念学会である。マアムーン・アカデミーとは、ホラズム地方において10世紀末から11世紀初頭に形成された学派の通称であり、研究所にその名を与えるビールーニーもこの学派の中心人物の一人に数えられる。その意味でも東洋学研究所には学会で牽引的な役割を果たすことが期待されている。すでに昨年5月には上記とまったく同旨の学会が当の研究所で開催され、これに関連して、[*Хоразм Маъмун академияси*, Масъул муҳаррир: Б. А. Абдуҳалимов, Тошкент, 2005] といった研究書も刊行された。もっとも、こうした大規模な記念学会は政令にもとづいて開催されるのが常であり、それは何らかの歴史遺産や歴史的な人物・事物を顕彰することによって国威発揚をはかろうとする政治の要請とも無縁ではない。あくまで印象ではあるが、この点で研究所はみずからに与えられた課題を、その史料所蔵機関・研究機関としての本分にしたがって淡々とこなしている観がある。

研究所ではこのほかにもさまざまな記念学会が所外にも報告者を募って随時開催されてい

る。昨年中には、かつての研究所長である故B. アフメドフ（1924-2002年）の記念学会、またザマフシャリーやベフザードの記念学会なども開催された。それのみならず、定例の研究会議もおよそ月に一回程度のペースで開かれており、そこでは研究所員を中心に研究成果の報告がおこなわれ、同時にまた、研究所の運営のあり方などについても話し合いがもたれている。さらに、希望する外国人研究者にも門戸は開かれており、昨年は米国のワシントン大学からの二人の訪問者（敦煌研究者と人類学の研究者）が、それぞれ別々の機会に所内で臨時の研究発表をおこなった。

科学アカデミー所轄の諸研究所には、2003年より新たなグラント・システム（研究補助金システム）が導入された。これにともない東洋学研究所では旧来のセクションが原則として廃止（ただし名目的には残存）され、部門別の体制から研究班別の体制へと移行した。グラント・システムの仕組みはおおむね次のようなものである。まず、各研究所は、基盤研究（5カ年）、応用研究（3カ年）、創成研究（1カ年ないし2カ年）という三つのカテゴリーにしたがって、いくつかの研究計画を立案する（この時点で研究班の編成と予算案の作成もおこなう）。ついで、これらの計画案を科学テクノロジー・センター（閣僚会議付属の研究技術向上調整協議会の下部に位置）に提出し、その審査にかける。そこで採択された研究課題についてのみ、国から研究補助金が交付されることになる（採択の場合でも予算減額はありうる）。そして研究所の研究員への給与は基本的にこの補助金から支給される。このシステムが経営の合理化をねらいとすることは一目瞭然であるが、同時にこれは、国家による各研究所の研究活動にたいする統制の強化をはかるものともとれる。いずれにせよ成果主義の洗礼は、目にみえる成果を早急に出すことの難しい文系学問を、ここでも苦境に立たせているといえる。東洋学研究所でもこれを楽観的にみる向きはない。グラント・システムがはたして研究所の慢性的な財政難を解消へと導くものなのかは、予断を許さないのが現状である。

現在研究所では、「中央アジア諸民族の科学的・宗教的・教育的・社会的思想の研究における写本遺産の役割とその現代的意義」、ならびに、「文書、ワクフナーマ、およびティムール朝期歴史史料の研究」という二つの基盤研究（2003-07年）が進行中である。一方、「中央アジアと境外東洋（歴史的結びつきと現代的諸問題）」、ならびに、「ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所写本蔵書の保存、目録化、修繕、機械的保守、およびその利用環境の充実」という二つの応用研究（2003-05年）がすでに満期を迎えた。まだ審査結果は出ていないが、これに先立って東洋学研究所から科学テクノロジー・センターには、新たに8件の応用研究の計画案が提出済みである。

東洋学研究所の研究員（全職員103人のうち約半数の52人）は、みずからの研究成果をおもに出版を通じて世に問うている（論文、小冊子、専門書、教科書、カタログなど）。全

研究員によって発表される論文の年間総計は百数十本にのぼり、それらは研究所の機関誌［*Шарқшунослик*］（1990-）をはじめ、［*Общественные науки в Узбекистане*］（1957-）、［*O'zbekiston tarixi*］（1999-）等の学術雑誌、もしくは論集などに寄稿されている。新聞の紙面上において、何らかの研究テーマで書かれた研究員の投稿記事を目にすることも少なくない。また、近年公刊されたとくに注目すべき研究書としては、ホージャ・アフラールの書簡集を扱った［*The Letters of Khwāja Aḥrār and His Associates*, Persian Text Edited by A. Urunbaev; English Translation with Notes by J. Gross; Introductory Essays by J. Gross and A. Urunbaev, Leiden / Boston / Köln, 2002］が挙げられる。

これとならんで、研究所の所蔵写本のテーマ別カタログが、90年代末からたてつづけに刊行された点も特筆に値する（［*Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан: История / Точные и естественные науки / Медицина*, Ответственный редактор: А. Урунбаев, Ташкент, 1998 / 1998 / 2000］、［*Каталог суфийских произведений XVIII-XX вв. из собраний Института востоковедения им. Абу Райхана ал-Бируни Академии наук Республики Узбекистан*, Составители: Б. Бабаджанов и др., Штутгарт, 2002］、［*Oriental Miniatures*, Edited by G. Pugachenkova, A. Urunbaev et al., vol. I-III, Tashkent, 2001-2004］）。しかし、未着手のテーマを残しながらも、すでに研究所ではカタログ編纂における方針転換がはかられている（これについては所内会議でも議論を呼んでいた）。現在では、いまだあきらかではない写本所収作品の総数算出と全容解明のために、東洋諸語写本全体をカバーする簡約カタログの編纂がはじまっており、これは現在申請中である応用研究の研究課題の一角をもなしている。また、研究所に所蔵される石版本についても、そのカタログ編纂が軌道に乗りつつある。

写本フォンドの保守・管理にかんしていえば、その環境整備のための対策も積極的に講じられている。新規に申請中の応用研究の研究課題も、うち二件がこれに直接関連するものである。昨年8月には、前回の応用研究の予算執行の一環として書庫に空調装置が完備され、蔵書の保存環境は確実に向上した。また、ドイツのヘンケル財団の支援を得て、写本のマイクロフィルム化とCD-ROM化・電子化がこれから本格的に進められる見通しである。この点で、欧米の進んだ蔵書保管システムを実見してきた所長からは、研究所の写本フォンドの環境を少しでも世界標準に近づけようとする強い意気込みが感じられる。

さて、東洋学研究所の利用にかんしても若干ふれておきたい。日本から研究所を訪れて写本の閲覧を希望する場合、自身が所属する機関ないし部局の長、もしくはそれに準ずる第三者からの紹介状（閲覧希望者の身分保証をともなう所長宛の閲覧許可願い）の持参が原則として必要となる。そして、所長と直接面会して研究テーマと閲覧希望写本を告げ、問題がなければ閲覧許可が下りるという手順になる。そのさい、外国人は閲覧料として1年につき50米ドル

を支払うことが規定されている。なお、所長（ないしは研究所）への書簡は、英語、ロシア語、ウズベク語のいずれかで書かれていれば基本的に受理される。写本閲覧室の開室時間は平日 9:00 頃～ 16:45 頃（金曜日は 15:30 頃まで）で、最近では希望すれば、昼休みの時間帯（13:00 ～ 14:00）にも閲覧を継続できるようになった（出納係にはその旨をあらかじめ伝える必要がある）。研究所の会議等の都合で閉室になることもあるので、その点は注意されたい。一度に請求できる写本は3冊までで、請求時には1冊につき1枚の用紙に、所蔵番号、請求者の姓、請求日を明記してこれに署名する。通常、請求してから5～10分後くらいには閲覧を開始することができる。稀覯本扱いの写本については、その原状保存の観点から、マイクロフィルム・リーダーを通じて閲覧することになっている。閲覧のためには所長ないし写本フォンド部長の許可が必要となる。また、マイクロフィルムの取得を希望する場合、利用目的と必要箇所等を記した申請書を所長に宛てて書き、その判断をあおぐことになる。

研究所への留学を希望する場合には、前もって受け入れ要請状（これに履歴書、所属機関の在籍証明書、パスポート・コピー等のしかるべき書類を添えるとよい）を所長のもとに送り、これが了承されれば、科学アカデミー外事課とのあいだで入国のための具体的な手続きをとることになる。この点については、ウェブサイト上の［島田志津夫「ウズベキスタン留学案内」http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/ab_s/ab_s24.html］（2004年4月）も参照されたい。研究所には契約を結んだうえで研究生として所属することになり、そのさい、規定にしたがって、1年につき3千米ドル（2006年3月現在）を支払う義務を負う。研究生の身分を得ると、希望する指導教官のもとで研究指導を受けられるほか、写本閲覧室や図書室で比較的自由に蔵書を閲覧することができる。種々の学会や定例の研究会議にも自由に参加でき、発表の機会も惜しみなく与えられる。また、たとえば、国内外の研究機関や文書館等での文献調査を希望する場合、所長の名前で在籍証明書や閲覧許可願いを発給してもらうことも可能である。概して、所長をはじめ研究所の職員はこちらの要望や相談に気軽に応じてくれ、研究活動のための環境は好適といえる。なお、留学にあたっては、ウズベク語かロシア語をある程度習得しておくことが望ましい。

最後に、研究所の近況について二三付言しておきたい。ウズベキスタン独立以降の研究状況にかんする筆者の質問に答えて、所長は、イスラームがれっきとした文化として研究されるようになった点と、国際的な学術交流が盛んになった点を特徴として挙げた。前者については、スーフィズム研究の活性化がこれを如実に物語っており、B. M. ババジャノフ氏の一連の業績をはじめとして、スーフィーやその著作を扱った研究が、研究所の何人かの研究員によって着々と積み重ねられている。後者については日本人研究者もその一端を担っており、それは今現在にもあてはまる。「ペルシア語文化圏における文字資料の収集と電子化」

プロジェクト（羽田亨一教授）におけるカタログ出版や『ターリーヒ＝ラシーディー』附編の校訂・訳注（新免康教授ほか）の出版は、東洋学研究所との協定にもとづくものである。また、長丁場にかかる「中央アジア古文書研究プロジェクト」（堀川徹教授）は、現在も研究所の研究員二名をメンバーとして迎え、目下、文書カタログの共同編纂作業が進行中である（既刊の［*Каталог хивинских казийских документов XIX-начала XX вв.*, Составители: А. Урунбаев, Т. Хорикава, Т. Файзиев, Г. Джураева, К. Исогай, Ташкент-Киото, 2001］は研究所と共同出版された）。他方、ドイツのマルティン・ルター大学東洋学研究所（J. パウル教授）とのあいだでも、いわゆる中央アジア三ハン国のヤルリクのカタログ出版が共同で準備されている。こうした状況を肯定的にとらえ、かつ研究員の研究遂行状況をおおむね良好としながらも、所長は現状にけっして満足していない。いわく、先達の業績を確実に継承しながら、活力ある研究活動のために人材育成と研究所の若返りをはかり、そのうえで、全体としての研究の質を世界レベルにまで押し上げていくことが今後の重要な課題である、と。

ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所連絡先

Al-Biruni Institute of Oriental Studies
Academy of Sciences of the Republic of Uzbekistan
(Director: Dr. Bahrom A. Abduhalimov)
Address: 81, H. Abdullaev Street, Tashkent, 700170, the Republic of Uzbekistan
Tel.: +(998-71)-162-54-61　Fax: +(998-71)-162-52-77　E-mail: beruni@globalnet.uz

（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）